ラジオ放送

＜平成26年10月～12月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.409

もくじ ～*contents*

＜取次を頂いて＞

☞ 取次を頂いていきいきと生活されている方を紹介します。

●第１回　パニックさん、ありがとう
金光教四条畷教会 坂本昭枝　*page 1*

●第２回　祈りのノート
金光教操山教会　古家鈴子　*page 7*

●第３回　神様が社長
金光教伊勢教会　杉山謙三　*page 11*

●第４回　お取次を頂いて
金光教今池教会　政後元祁　*page 15*

＜信者さんのおはなし＞

☞ 金光教の信者さんの体験談を紹介します。

●どこまでもまっすぐな道　*page 19*

●お礼と喜びの日々を　*page 23*

●いつも、前を向いて　*page 27*

●ありがとね　*page 31*

●化粧品店を続けて50年　*page 35*

●わがいのち　*page 39*

●二つの大震災に遭いました　*page 43*

●いいこと、いっぱいあるから　*page 47*

●失敗もＯＫ、何でもＯＫ　*page 51*

《取次を頂いて》第一回

「パニックさん、ありがとう」

金光教四条畷教会　坂本昭枝

ナレ　皆さんは、「パニック障害」という病気をご存知でしょうか。ある日突然、漠然とした不安に襲われ、心臓の高鳴り、呼吸困難などで気持ちをコントロール出来なくなり、パニックに陥ります。そして、「このまま死んでしまうのではないか」という強い恐怖感が慢性的に起こります。

大阪府四条畷市にお住まいの坂本昭枝さんは現在七十歳。結婚して間もない二十四歳の時、通勤途中のバスの中で、パニック発作に襲われました。

坂本　そのバスで、とっても混んでましたのでね、もう急に降りたくなって、途中次の駅で降りたんですね。その時に、新婚旅行に行った時の昔のネガがなくなっていたのに気付いて。混んでいるのも怖かったんですけど、その時に、その大事な、もう取り返しが付かないネガが無くなったということで、すごいね、怖い…。大事な物を無くしたっていうのと一緒で、もうそれ以来、混んだバスが乗れなくなったんですね。

ナレ　坂本さんの症状は、段々と日常生活にも

大きな支障をきたすようになりました。

坂本 いっぱい出てきましたね、どっーと。例えば、八時になったら病院が閉まりますよね。そうしたら病院に行けない。翌日まで開かないですね、救急車以外は。

時計を見ながら、七時になってきたら、もう毎日の生活が苦しかったですね、もう病院は閉まるって。診てもらえないって。この苦しく、ガッーと締め付けられるような気持ちになった時に、何かして欲しいっていうそういう不安がもう毎日ありましたね。ですから、「八時病」って自分で名付けてるんですけど、八時になるのが怖い病気がまたそこでありましたね。

もう一つは、「書けない」っていうのも出てきましたね。ポストに入れたら、手元に返ってこないっていう。ほんと怖いんですね、出すのがね。だから、友達に書いてもらって出してもらうとか、年賀状も書かなくなったから、友達も減りましたね。ほんとに自分でも何でやと思うけど、書けないですね。

家事も出来ないし、もう普通の生活が出来ない、そういう状態でしたから、もう生活が苦しかったです。

ナレ　**あれも出来ない、これも出来ない、そんな苦しい毎日を送っていた坂本さんでしたが、四十五歳の時、信心をしていたお姉さんの勧めで、金光教の教会に初めてお参りしました。**

金光教では、教会の先生が参拝者の悩みや願いを聞いて神様にお祈りをし、お話してくれます。これを「お取次」と言います。坂本さんは、先生に心の内を全て打ち明けました。そこでの「お取次」が、坂本さんの人生を大きく変えることになります。

坂本　ほんとに助かりたい一心ですから、今の教会長先生にね、ここに来させて頂いた理由を、ずーっと今までのことを延々とお話させてもらったんですね。

で、その時に頂いた言葉が、「神様は、あなたと一緒に悲しんでおられる」っておっしゃったんですね。

「えー」って。「あなたが悲しむと神様も悲しんでおられるよ」っていうことをお聞きして、「神様ー」ってひれ伏すような神様ではなくて、自分の身近に、一緒に共に居て下さる神様なんておられるんだっていうのがあって、これはすごいなあって思いまして、その言葉を頂いた時に、「もう私は助かるなあ」って思いましたね。

ナレ　坂本さんの心は救われました。そしてこの神様のことをもっと知りたいと思うようになります。

坂本　もう毎日、お参りしたくてですね。もう聞くことがうれしくてですね。「明日、塩辛を食べるからといって、今からお水を飲むわけにはいかない」とかいう、そういうのなんて、一番分かりやすいみ教えで、もう夢中でしたね。お参りがうれしかったですね。神様のみ教えっていうのが逆に薬になりました。
そして「八時病」というのも消えましたね。教会は何時にでも開いていて聞いて下さるという、そういう安心感がありましたから。

ナレ　教会にお参りし、お取次を受ける。こうした毎日が坂本さんのパニックを安心に変えていきました。やがて、つらかった症状も次第に改善し、出来ることが増えていきました。そして、気付かされることもありました。

坂本　この病気があったからこそ、どこに行くのも当たり前じゃない、電車に乗っていくのも当たり前じゃない、食事を頂くのも当たり前じゃない。で、トイレに行かせて頂くのも、「ああトイレ行かせてもらえる、有り難い。トイレ出てありがとうございます」って、これをきれいごと

じゃなくてほんとに心から思わせて頂けることだったんですね。そのパニック症があったからこそですね。

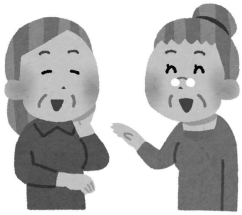
ナレ　坂本さんには二人のお子さんがいます。お孫さんも出来ました。ご主人も、坂本さんを温かく支えてくれます。坂本さんは振り返って、こう話してくれました。

坂本　出来なかったことはいっぱいありましたけれど、出来ていることもいっぱいありますね。それ以上にあると思っています。私もまだパニック症が全部治った訳じゃないんですね。地下鉄は怖いですし。けれども、お願いしながら地下鉄に乗らせて頂くとか、いろんなことはですね、願いながらさせて頂けるものを、私は、残して頂いていることがおかげだと思っているんですね。

だから、どこに行くのも有り難いって思えます。他の方よりは倍ね。「行けるかな、どうかな、神様」って願って実現することですから。「私は有り難い自分だなあ」と思ってるんですね。私はこれはあえて神様が、置いといて下さっていると、そう思わせて頂いているんです。だから、もうこれは全部平気になったら駄目だと逆に思っていますので、これは自分でもほんとに確信して持っていますね。

「なぜこんな病気になったんですか。治して下さい」っていう初めの思いはですね、この病気があるから、有り難いことも、当たり前ではないことも教えて頂けたっていう道筋だったと思うと、もうほんとに、「この病気さんありがとう」っていう、そんな気がしますね。

ナレ　「神様はあなたと一緒に悲しんでおられる」という人生を変えたお取次から二十数年。坂本さんのパニック障害は、いつしかなくてはならない大切な宝物となったようです。



《取次を頂いて》第二回

「祈りのノート」

金光教操山教会　古家鈴子

私は、今から四十年程前、嫁ぎ先の義母の勧めで金光教にご縁を頂き、岡山県にある金光教操山教会へお参りさせて頂くようになりました。

初めのころは自分の都合に合わせてお参りしておりました。生活の中でのお詫びやお礼はしないでお願いばかりしていたと反省します。形式ばかりで神様に向かう心が伴っていなかったようにも思えます。

やがて、月初めの一日にお参りしてお取次を頂き、一カ月のお願いをさせて頂けるようになりました。

お取次とは、先生がお参りになった方々の願いや心の内を聞き、共に祈り、そして、神様の願いをお話しになるというものです。

その後、お参りする度に、先生から色々なお話を聴かせて頂くようになりました。

三人の子どもたちが受験の年には、志望校合格を願って毎日お参りさせて頂きました。お参りをして、先生のお話を聴かせて頂く中で、合格という目先のことのみお願いするだけでなく、学校へ入った後のこと、更にその先のことを見越してお願いしていくことが大切であると教えて頂きました。

そして、私が本当に助かりたいとお取次を頂いたのは、主人が失業した時でした。予期しな

い出来事でした。当時、子どもたちは三人とも学生でした。経済的なことを考えますと、一刻も早く次の勤め先を見付けて就職して欲しいと願うばかりでした。

先生に私の気持ちを聴いて頂いた時に、「まず、これまで働かせて頂いたことにお礼申しましょう」と教えて下さいました。主人が毎日働いてくれていたのは当たり前だと思っていましたが、そうではなかったと気付かされました。

起きてきたことへの不満や不足はあっても、健康で働いてくれていたことへの感謝の気持ちが足りなかったのです。先生から、「難儀な中にあってもそれ以外の数々のおかげを頂いている。お礼の心が大切ですよ」と教えて頂いたにもかかわらず、いざという時にはそういう思いには至りませんでした。私自身も改めなければと気付かせて頂きました。次第に気持ちも落ち着き、不安も解消していきました。

主人も就職活動に前向きに取り組むことが出来、その結果、就職先も決まりました。現在も元気に働いております。あの時のことがあったからこそ元気で働いていることを喜び、当たり前ではなく有り難いことであると受け止めさせて頂いております。

昨年秋、操山教会では、設立百十年を迎えました。それを記念して教会から「祈りのノート」を配って頂きました。祈りのノートには、私たち信奉者一人ひとりが、自分のことのみではなく、家族や身内のこと、更に友人やその家族のことまでをも祈れるようになって欲しいという

願いが込められています。

私は、身の回りに起きて来る色々なことを一つひとつお取次を頂き、私自身が改まらねばと気付いたことや、助かって欲しいと願う人のことなどをノートに書いております。

例えば、姉の夫は三年程前から認知症もあって、自宅介護が困難になり施設に入所しております。最近では、記憶力も衰え、パーキンソン病の症状も出てきましたが、姉や子どもたちが面会に行くと笑顔で迎えてくれます。何よりもうれしいのは、自分たち家族のことを覚えてくれているということです。今後も姉の夫の助かりと家族の幸せを祈らせて頂きたいと思います。

また、小学三年生になる孫は、幼いころから人見知りの性格のため、お友達や周囲の人とのコミュニケーションが上手に取れませんでした。学校のお昼休みも教室に一人で居ることが多くて、そのような孫の様子を想像して何とかしてやりたいと思っていました。

ある時、春の遠足でお弁当を一緒に食べる友達が居なくて不安がっていると聞きました。このようなことをお取次願うことにためらいはありましたが、楽しい遠足になりますようにとお願いしました。

すると、担任の先生が、クラス全員が一緒に昼食を取るように計画して下さり、有り難いことになりました。

最近は図書室や運動場に出て、元気に学校生活を送っています。また、音楽発表会ではお役

を申し出たりと何事にも積極的に取り組み、そして参加出来るように徐々に変わってきております。私が願っていた以上のおかげを頂いております。引き続き、孫自身がお友達や先生の優しい心に気付き、成長することを願うと共に、子育て中の娘が、親としてお育て頂くことも願っております。

日常生活の中で当たり前と見過ごしていた事柄が、いかに有り難いことであったのか教えて頂きました。そして、そこに神様の尊いお働きを感じることが出来るようになったと思います。

今から振り返ってみれば、主人のことや孫のことなど数々のおかげを頂いてきました。お取次を頂き、神様にお願いしていけば、神様が良いようにして下さると実感しました。これからも先生にお取次を頂いていきたいと思います。そして「祈りのノート」に託された願いのように、自分のことだけでなく周りの人のことまで祈ることの出来る私にならせて頂きたいと願っています。

《取次を頂いて》第三回

「神様が社長」

金光教伊勢教会　杉山謙三

ナレ　**杉山謙三さんは現在六十七歳。三重県伊勢市にある金光教伊勢教会にお参りされています。代々金光教を信心する家庭に育った杉山さんのいつも身近に、教会はありました。**

杉山　私は、信心三代目でございます。祖父の代からの金光教ということで、子どもの時分に、もう既にお広前で遊んでおりました。伊勢教会も本当に家族的で、私どもの場合は育てて頂いたし、周りを取り囲んでくれる人というのは、逆に見守って頂いたというか、本当にお教会の中でお育て頂いとるという部分については、非常に恵まれた立場にあるというふうに思わさせて頂きますね。

ナレ　**杉山さんは、お父さんから家業である水道・空調設備の会社を受け継ぎます。信心深かったお父さんに、杉山さんは大きな影響を受けました。「仕事は自分の力でするのではなく、神様にさせて頂く」。この思いを大切にしながら、今日まで仕事に携わってきました。**

杉山　「家業という業にお使い頂いとる俺は、

社長という番頭なんや」という、そのことに思い至った時に、「俺が俺が」ということやなしに、ともかく経営の上では、仕事をするということではなくて、「私は結局、杉山設備の社長という名の番頭なんや」という考え方に立ち、お使い頂いている。そういうふうに思いますね。

ナレ　金光教の教会では、奉仕する先生が、お参りした人の願いを神様に祈り、色々な教えを話してくれます。これをお取次と言います。自分の仕事は神様から授かったものだと思い、一生懸命に働く杉山さんの支えになったのは、教会の先生の姿でした。

杉山　結局受け切って頂けるという安心感がございますよね。良いことも悪いことも結局受け切って頂く。

私としては、一生懸命にご祈念して頂いているという姿勢を現実に見て感じて、肌で感じておりますから。教会へお参りする時に、先生が、ご神前へ額ずいて一生懸命ご祈念して頂いている姿勢が再々と自分の目に映るわけですよね。親先生のご祈念の姿勢、平生お参りがない時にご神前で額ずいてご祈念してみえるという姿勢を見させてもろうた時にね、やっぱりあそこまで本当に真剣に…そんなことを親先生もひと言も言いはなさいませんけど、その姿を見させてもらう時に、

もっと真剣にお取次を頂かないかんのやろうなと思います。

ナレ　お取次を頂くのは、仕事のことだけではありません。数年前、杉山さんのお母さんが認知症になって、事実ではないことを色々言っては周りの人を困らせるので、先生に率直な思いを打ち明けました。

杉山　もう、うっとうしいもんですから、なるべく近寄らないようにして、教会に行っても、うっとうしいというお届けしかしなかった。そやけど親先生に、「それは違う」ということで。母親が今日まで生かされてきたということを、母親が今日まで命を頂いてきたお礼を申し上げて母親に接すると、言わんようになった。それで手を合わせるようになった。すると、母親の態度も変わってくるんですね。

ですから、自分が母親のことについて鏡みたいに、自分の信心が曇ると、やっぱし母親の病気が出てくる。自分の信心が母親のことでお礼の言える気持ちにならさせてもらうと母親が喜ぶというか、穏やかになるというような鏡みたいなことが、ここ二、三年現れて参りまして、そのことを一つずつ改まるなり、考えを改めさせて頂く。またそういうことを勉強させて頂くということで本当に現れてくるというか、そうすると本当に不思議…

不思議と言ったらいけませんね、成就していくんですよね。

ナレ　毎日教会にお参りし、お取次を頂く杉山さん。今ではとても安心な気持ちで過ごしておられます。杉山さんは、朝起きた時、夜寝る前に布団の上で神様を拝みます。

杉山　今はね、ほとんど無に近いです。ありがとうございましたっていう無に近いです。今日も一日無事に済ませて頂いてありがとうございます。休ませてもらいます。本当に今こんなに恵まれとって、逆に、「神様、こんなにお与え頂いてよろしいんですか」というくらい本当に恵まれておる状態ですから、杉山家にとって、私の代にとって、父親から頂いた徳をですね、今度は自分の息子や娘や、それから今はちょっと息子や娘は飛び越えて孫にですね、例え一割でも積み増しをさせて頂けるようなことを、今、一生懸命願わせて頂いてますね。

ナレ　神様に使って頂くという思いを胸に、杉山さんはこれからも神様と一緒に歩もうと願われています。

《取次を頂いて》第四回

「お取次を頂いて」

金光教今池教会　政後元祁

私は昭和三十八年に中学時代の同級生と結婚しました。家内は、結婚の話が出た時、参拝していた金光教の教会の先生から、「夫婦一緒に信心をさせてもらえるといいですね」と言われました。私は宗教の自由の時代におかしいと思いましたが、調べてみると、教祖様の実直な生き方に感動を覚え、また教えも素晴らしく、これは本当の宗教だと思いました。やがて、結婚二年後に一人娘を授かりました。

娘が成長し、短大を卒業して銀行に就職することになりました。一年ほどを経過したある日、娘の様子がおかしいと連絡があり、至急、銀行へ迎えに行くと、娘はぐったりして、疲れ切った様子で大変驚きました。

翌日、神経科病院で診察してもらった結果、統合失調症ということで、私も家内も驚き、心配と不安で暗い気持ちになりました。通院では治らないと言われ、入院となりました。娘の病気は簡単には回復せず、入退院を繰り返すようになり、次第に私も家内も、治療を続けても一生治らないだろうと思うようになりました。

しかし、当時の私は商社勤めで、ノルマに頭を悩ませ、夜は接待の連続で、娘のことはすべて家内任せ、病院任せでした。家内は四六時中、心配ばかりしていたと思われ、「叱り叱り育てた私が悪かった」と、自分を責め、次第に家内

も安定剤を多量に服用しなければ生活出来ない状態となりました。娘はその弱っていく母親を守らなければならないと思っていたらしく、娘にとっては抱えきれない苦しみであったと思います。

金光教には色々な願い事を教会の先生にお話して、先生を通して神様に願い、また神様の願いも聞かせて頂く「お取次」ということがあります。しかし、当時の私たち夫婦は、娘の病気は神様にお願いして治ることはないと思い、真剣にお取次を頂くことはありませんでした。

十年前に家内が亡くなり、私は娘と二人暮らしになりました。娘は長年の病気で人格が破壊されたのではないかと思われるほど、時に暴れたり、泣き叫んだり、睡眠薬を限度まで多量に飲んでいるのに、ちっとも眠れず、付き合う私も睡眠不足の毎日でした。さらに私は、慣れない家事にも困り、「私がいなくなったら、娘は一人で生きていけるのだろうか？」と考えると心配と不安いっぱいで、意を決して、お取次を頂きました。「私はどうなってもいいですから、娘を助けて下さい」とお願いしました。

教会の先生は、「あなたが助からなければ、娘さんは助かりません」とおっしゃり、「まず、あなたが神様をしっかりと頂きなさい。娘さんとしっかりと向き合って、あなたが神様を頂いている姿を見せていくことが娘さんも助かることになるのです」と言われました。

神様をしっかり頂くといってもどうすれば良いか分からず、金光教の本を手当たり次第読ん

では、どうあれば良いかを求め、ただただ、朝に晩にお参りして、「娘を助けて下さい」と祈り続けました。

先生から、「日常の生活の中でしっかりと娘さんと向き合いなさい」と言われて、私は初めて、娘のことを何も知らなかったことに気付きました。娘の言うことも行動も、「困ったことだ」という心配としてしか、映っていませんでした。

先生は昼夜が逆転している娘に、「朝起きて、朝の光を浴びましょう。そのために、毎朝十時のご祈念に参拝するように」と言われ、連れて行くと、何時間も娘の話に真剣に耳を傾けて下さり、一つひとつに丁寧に答えて下さいました。娘は、「どうせ、自分は病院で死ぬんだ。私なんか生まれてこなければ良かった」と言って、先生にも、「どうせ私を見捨てるくせに」という態度でした。それでも先生は、「このままでは可哀想。娘さんを何としてでも助けたい」と、必死に娘と向き合って下さり、祈り通して下さいました。

そして先生は、「娘さんは、あなたへの憎しみもあるみたいです。仕事のためとはいえ、お酒の飲み方が悪かったようですね」と言われ、「お酒をやめて、あなたも変わらなければなりません」と厳しく言われました。お酒を飲むと、知らないうちに家内や娘を責めていたことを知らされ、私はお酒をやめ、自分が改まることに取り組みました。

そんな中で先生は私に、「娘さんは毎日を精

いっぱいに生きています。彼女は彼女で、一生懸命に助かりたいと願っているのですよ」とおっしゃいました。私はそんなこと、思ってもみませんでした。私が娘を助けてやらねばならないとのみ思っていたのです。

娘は、次第にお取次のお言葉の通りに取り組めば、少しずつ何かが変わっていくのが感じられたようでした。自分から進んで参拝するようになり、毎日、お話を聞き、自分の身の回りのことや、時々食事の支度もするようになりました。今では睡眠薬も飲まずに寝られるようになり、私にとっては夢のような、穏やかな生活が出来るまでになりました。

今、娘は四十八歳になりましたが、家内の十年祭には霊前に手を合わせ、「生んでくれて、ありがとう」と言ってくれました。私は十年前を思い返し、絶対に治らないであろうと思っていたのに、「神様は本当におられるなあ」と感じて、神様のお働きに、心からありがたいとお礼を申しています。今では、娘は、お医者さんも驚くほどに回復させて頂いています。

私たちだけではなく、同じように悩み苦しんでいる人たちにも助かって頂きたいと願っています。

《信者さんのおはなし》

「どこまでもまっすぐな道」

小学校四年生の夏、新しい水中メガネを買ってもらい、友人と磯遊びに出掛けた少年は、夕方家に帰る途中、水中メガネを忘れたことに気が付きました。幼いころから、両親に連れられ、金光教の教会にお参りしていたその少年は、「せっかく買ってもらった水中メガネ。早くしないと潮が満ちて流されてしまう」と、気持ちばかりが焦り、「神さま、神さま～」と必死に叫びながら、無我夢中で海岸へと引き返しました。海辺へ戻ると、着替えていた場所はすっかり潮が満ちていました。

「もう駄目だぁ」。諦めかけたその時、目の前に探していた水中メガネが、プカッと浮かび上がってきたのでした。少年は驚きました。「神様は自分のことを必ず見てくれている。必ず守ってくれている！」と感動しました。この時の体験は、幼い少年が神様を感じるには十分な出来事でした。

古来、神が舞い降りたと言われる場所、熊野。熊野古道は十年前世界遺産に登録され、その名が一躍有名になりました。熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の三つの神社は、熊野三山として親しまれています。

その熊野三山の一つ、熊野本宮大社で雅楽に使われる楽器の一つ、篳篥（ひちりき）を四十年にわたり吹き続けている田中克之介（たなかかつのすけ）さんは、テントを製造、販売する今年七十八歳になる男性です。和歌山

県の金光教新宮教会に熱心に参拝しています。若いころに雅楽の音色、演奏する姿の美しさに魅せられ、自ら篳篥を演奏するようになりました。やがて熊野本宮大社でも演奏するご縁を頂くようになったのです。

神や仏、修験道など多様な信仰に彩られた熊野の地で育ったせいなのでしょうか、田中さんの好きな金光教教祖の教えは「わが信ずる神ばかり尊みてほかの神を侮ることなかれ」。

幼いころに経験した水中メガネの出来事以来、金光教への信仰には揺るぎないものを持っている田中さんですが、自分が信心する神仏ばかりを尊んで、他の神仏を軽くみたり、見下してはだめですよ、という広く大きな教祖様の態度に感銘を受けました。

そのことが、他の宗教にご縁を頂いている方を尊重し、決して人をそしらない姿勢につながっているのです。

普段、人と接していると、つくづく感じることがあります。それは、信仰を持つ人と触れ合うと、その人の言葉やしぐさであったり、その温もりが、柔らかい光に包まれているような安心をもたらしてくれるのです。

そんな田中さんの信心姿勢を物語る話があります。

田中さんは、三十五歳から七十七歳になるまで、四十二年もの間、地域の民生委員を務めました。就任するに当たり、教会の先生から、「しっかりやらせてもらいなさい」と声を掛けてもらいました。たった一言ですが、その言葉の力

強さ、優しさ、それは神様からの言葉として胸に刻まれたのです。

ある時、地元の社会福祉協議会が、体の不自由な方や高齢者の方を対象に入浴のボランティアを行うことになりました。それを聞いた民生委員の間にも、「ぜひ、協力させてもらいましょう」という声が上がり、六十歳以下の民生委員が全員協力することに決まったのです。

ところが、いざ当日になってみると現場に姿を見せたのは田中さん一人だけでした。それでも、決して他の人を責めたり、恨んだりする気にはなりませんでした。「しっかりやらせてもらおう」という思いに加え、少しでもお役に立たせて頂きたいという願いの方がずっと大きかったからです。

それは、幼いころから教会にお参りし、自然に身に付いたものでした。決して迷うことなく、神様に心が向くようになっていたのです。それからも、「ネズミを捕って欲しい」とか、「ムカデにかまれたので何とかして欲しい」などといった、そんなのは民生委員の仕事じゃないだろうと誰もが感じることでも、その方の思いに寄り添って対応していきました。

そんな田中さんに、平成十二年、六十五歳の時に、国から藍綬(らんじゅ)褒章が贈られました。これは、公のために尽くした者に与えられる褒賞です。皇居で授賞式に臨んだ時は、万感極まる思いでした。それは褒章そのものよりも、神様を尊ぶ心を失わずにここまで生きてこられたことに対する感謝と誇りの気持ちでいっぱいになったか

らでした。

　そのことを語る田中さんの姿からは、その日その日を新たな気持ちで、神様に心を向け、気負うことなく生きてきた、一日一日の尊さが透けて見えます。きっと様々な困難にぶつかることもあったでしょうが、そのことを感じさせない、しなやかな姿です。

　田中さんの現在の願いは、今のままの信心をそのまま続けさせて頂くこと、そしてもう一つ、この間違いのない神様を後世に伝えていくことです。

　奥さんは、結婚して以来、家に祭っている金光教の神様にはご飯を、ご先祖様にはお茶を毎日欠かさずお供えしてくれています。長男は、横浜で就職したものの、今では嫁と孫と一緒に新宮に戻り、家業のテント製造販売会社を経営してくれています。高校生と中学生の孫も折に触れては、教会にお参りし、神様に手を合わせてくれています。

　太陽がきらめき、風が森を渡り、木々の緑がまぶしい熊野の大地。理屈や理論や利害ではなく、気高きもの、聖なるものを敬う気持ち。素朴でたくましい信仰の美しさ。すべての命を認めていく心が引き継がれていく限り、この世界は光り輝く。未来への希望は、一人ひとりの心から生まれるのです。

《信者さんのおはなし》

「お礼と喜びの日々を」

福岡県古賀市は九州の北部にあり、流通や交通の面で豊かな生活環境が整っています。また西に玄界灘、東には山々が連なり豊かな自然にも恵まれています。

その古賀市の中心部にある金光教古賀教会に毎朝参拝している三上カヅ子さんは七十歳、笑顔の素敵ないつも明るく元気なご婦人です。

カヅ子さんと金光教の関わりは、物心つく前からお母さんに手をひかれて教会にお参りしていたことに始まります。お母さんと一緒にお参りしたことはカヅ子さんにとってとても楽しい思い出です。

しかし、お母さんはカヅ子さんが十歳の時、四十歳で亡くなりました。大好きなお母さんを亡くしたカヅ子さんにとって、教会は心の寂しさを埋めてくれる、また心の安らぎを与えてくれる大切な場所となりました。教会の先生方から我が子のように可愛がってもらい、更に生きていく上で大切なことを一つひとつ教わりながら成長していったのです。

その後、結婚して三人の子どもにも恵まれました。嫁いだ先は兼業農家をしていて、ご主人は勤めているのでカヅ子さんは慣れない畑仕事に家事や育児と目の回るような忙しい日々を過ごしていました。結婚前ほどゆっくりと、また頻繁に教会参拝が出来なくなったこともあり、カヅ子さんの心は言い知れぬ不安と心配でいっ

ぱいになり、どこか遠くへ逃げ出したいとさえ思うようになっていきました。

そんなある日のこと、車を運転中に大事故を起こしてしまったのです。それはカヅ子さんが四十六歳の時のことでした。居眠り運転をしてしまい電柱に正面からぶつかったのです。足は車から突き抜け、頭と顔は血まみれ、体は押し挟まれ、事故処理用の車を使って外に出されたそうです。

カヅ子さんは事故前後の意識はなく、目が覚めるとすでに手術が終わっていました。鼻にはチューブ、全身に包帯を巻かれ、足は曲がらないように固定されています。意識が朦朧(もうろう)とする中、大変なことをしてしまったと思いつつ、「ああ、神様が助けてくれたんだ」と涙があふれてきました。

実はこの事故の時、本当に神様のおかげとしか言えないことがいくつも重なっていたのです。まず、通り掛かりの人や車にぶつかっていてもおかしくなかったのに電柱であったこと、そして電柱に激突した際、近くに女子高校生が居合わせ、すぐに救急車を呼んでくれたこと、また、担ぎ込まれた病院には普段一人しかいない整形外科の先生がこの時に限って三人おられたこと、そしてその三人の先生が手分けをして十二カ所の手術を八時間かけてして下さったこと、など。カヅ子さんは無い命を神様に助けてもらった喜びを噛みしめつつ、入院生活を過ごしていきました。

入院してから二カ月間は体を全く動かすこと

は出来ず、全て看護師さんのお世話になりました。その後、体を動かすリハビリを始めましたが、足は鉄の棒のようになっていて動かそうとするととても痛いのです。カヅ子さんはあまりの痛さに泣きました。しかし、泣く泣く辛抱しながらリハビリを続けていると膝は少しずつ曲がるようになりました。足を曲げたり伸ばしたりといった当たり前のように出来ていたことがこれ程大変なことだったのかと分かると、「これまで喜ぶことが少なかったなぁ」と反省するカヅ子さんでした。

八カ月間に渡る長い入院生活を終え、お世話になった病院を退院する日が来ました。そのころはステッキを突いて歩けるまでに回復していました。退院したその足で教会へお礼参拝すると、教会の先生はとても喜んでくれました。今回の事故はもちろんのこと、これまでもずっと教会の先生から祈られてきたんだと本当に有り難く感じ、改めて神様に守られているんだと確信したのです。

それからのカヅ子さんは周囲が驚くほどの回復を見せ、ステッキ無しでも歩けるようになって、教会では正座をして座ることも出来るようになり、再び車の運転さえ出来るようになりました。その頃から毎朝教会へ参拝し、先生と話をすると清々しい思いで一日を迎えることが出来るようになりました。

先生から、「不平不満は稽古をしなくても出来ます。お礼と喜びは日々稽古をしないと出来ませんよ」と言われ、カヅ子さんは事故の時の

ことを振り返りながら、本当にその通りだと思い、どんなことが起きてきても喜び、お礼が言える稽古を毎日取り組んでいきました。日々の忙しさは以前と変わりませんが、それが喜びとお礼に満ちあふれた一日一日となっていったのです。

あの事故から十年後、今度はご主人が脳梗塞で倒れ、二年間入院しました。この時も、「自分と重ならなくて良かった」と神様にお礼を申しながら、喜んで看病に勤めました。ご主人は退院後、車椅子での生活になりましたが、車椅子のおかげであちこち行くことが出来るとカヅ子さんは喜びます。その後、ご主人は徐々に弱ってきて寝たきりとなってしまいましたが、カヅ子さんは自分が元気だから介護が出来ることを喜んでいます。

自宅での介護はとても大変なことが多いのですが、長い間毎日お礼と喜びの稽古を積み重ねた結果、何事も有り難くさせてもらえるのです。例えば、ご主人がおしっこをたくさんして衣類がビチャビチャに濡れても、おしっこが出ることが有り難いと喜びます。

「今朝もお参りした時に教会の先生から、『昨日を忘れ、今日を喜び、明日を楽しみに』と教えて頂きました」と明るく語るカヅ子さんの夢は、三人の子どもと五人の孫にこの大切な信心を伝えていくことです。

《信者さんのおはなし》

「いつも、前を向いて」

都内のとある私鉄沿線。電車を降りるとウルトラマンが迎えてくれます。その駅前の商店街を抜けると閑静な住宅街。今日ご紹介する西野光一さんがいつもお参りしている金光教成城教会は、その住宅街の一画にあります。

がっしりとした体格に、人懐っこい笑顔が印象的な西野さんは、今、四十四歳。中古のカメラなどを取り扱う会社を経営している、元気いっぱいの若い社長さんです。

西野さんは、毎日のように教会に参拝しては、会社のこと家族のことを神様にお祈りし、教会の先生に願い事を聞いてもらっています。気が付けば一時間二時間と、時を忘れて、先生と話し込んでしまっていることも少なくないそうです。

西野さんは、「いつお参りすると決めているわけではなくて、お参りしたいな、と思う時に教会へ行くんです」と話します。そしてこのことを、神様に呼ばれている感覚、と表現します。

そんな西野さんですが、若いころには、それほど熱心に教会に参拝していたわけではありませんでした。祖父母も両親も金光教の信心をしていたので、教会は身近な存在だったし、神様ということも、それほど違和感なく受け入れていました。しかし、自らの意思でお参りしたり、神様にお祈りしたりということは、あまりありませんでした。

転機となったのが二〇〇八年、いわゆるリーマンショックでした。アメリカの大手証券会社の破綻から始まった金融危機。それにより、世界経済は大きな打撃を受けました。そのあおりを受けて、西野さんの会社も売り上げが激減し、資金繰りが悪化。そして、大きな負債を抱え、経営が苦しくなってしまいます。その時、西野さんは三十八歳、父親が亡くなった後の会社を受け継いで三年目のことでした。

景気は落ちこみ、業績も伸びない、借金ばかりかさみ、返済が迫る…。自分の力ではどうすることも出来ない。先の見えない中、とにかく毎日教会にお参りすること、そして神様に祈ることを続けました。

教会の先生は、いつも西野さんのことを気に掛けてくれていました。そして、話を聞いては、一緒に神様に願って下さいました。西野さんはそのころのことを、「わらにもすがる思いでした」と振り返ります。

そんな時に出合ったのが「神様がご主人、私は奉公人」という言葉でした。これは明治の終わりから戦前に掛けて大阪で活躍した、金光教のある布教者の言葉です。商家に勤めていた自身の体験から、神様と人間との関係をこのように表現したものでした。現代からすると、「ご主人」とか、「奉公人」とか、古臭い感じがするかもしれません。でも、西野さんの心には、それがすーっと染みこんだのでした。

神様がご主人、つまり、社長ということか。これまで、自分は社長として一生懸命、経営の

ことに取り組んできた。それなりに業績も伸ばしてきたつもりだった。でも、本当はどうだったのだろうか。これからは、社長の神様の下で働くつもりで、仕事をしていこう。そう心に決めたのでした。

そうなると目の前にあるのは経営の再建です。例えば多額の借金の返済。銀行に足を運んだのは、一度や二度のことではありません。何度も何度も頭を下げて、交渉を重ねました。「銀行にこちらの条件を受け入れてもらうなんて、どうしても無理なことかもしれない」。そう諦めかけたこともありました。

そんな時、思い出したのが「神様がご主人」ということでした。そうだ、社長である神様に命じられて、銀行との交渉に当たっているのだ。これは神様のお仕事なのだ。自分が勝手に諦めるわけにはいかないのだ。そして、また気を取り直して、銀行に向かいます。ついには、こちらの願う通りの条件で、銀行が返済を待ってくれることになりました。

経営の再建は、そんなことの連続でした。だから、「自分が自分の力でやっているのではない。神様にさせて頂いたからこそ、出来たのだ」と、西野さんは振り返ります。

その後、自社ビルの売却がうまくいき、借金も順調に減らすことが出来ました。会社の規模は小さくなりましたが、経営は何とか持ち直しました。特に、この三カ月は、過去最高の売り上げになりました。

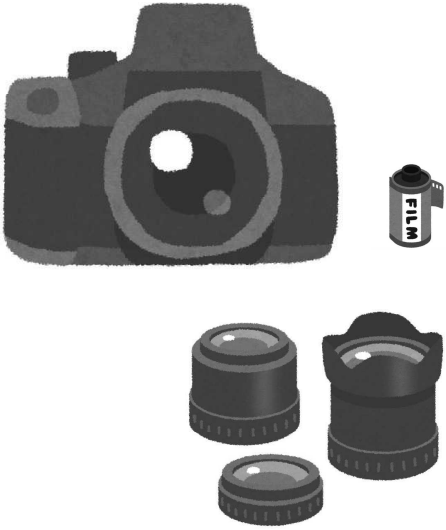
「これは、社長の神様から頂いたご褒美かも

しれません」と西野さんは話します。そして、次のように続けます。

「でも、ほんとうに大切なのは、実は、どのように厳しい状況の中でも、常に前を向いて立つことが出来る、そのような精神状態になることが出来るということだと思います。私にとって、そんな心を養ってくれるのが、この金光教の信心なのです」と。

西野さんは、神様に使って頂くという思いで、一つひとつの仕事に取り組み、そして、神様と共に歩んできました。そのことで、どんなにつらい中でも、くじけずに前を向くことが出来たのです。そして、こういう生き方があるということを、今度は周りの人たちにも伝えていきたいと、願っています。

今日はどんなことが起こってくるだろうか。そのことを通して、神様は、何を見せて下さるだろうか。何を気付かせて下さるだろうか。そんなことを楽しみにして、一日一日を大切に生きていきたい。こう語る西野さんの目は、少年のようにきらきらと輝いていました。



《信者さんのおはなし》

「ありがとね」

岐阜県の金光教笠松教会にお参りする小森糸子さんは今年六十七歳、デイサービスの事業所で若いスタッフに交じって元気に働いています。

六十歳の時、長年勤めていた金属加工会社を定年退職した後、まだ自分に出来る仕事はないかと、いろんな就職先を探した結果、採用してもらったのが、このデイサービスでした。

介護資格のない彼女ですが、資格の必要なこと以外は何でもやります。洗濯、食器洗い、事務、雑用、何でもこなします。粗相のないようにと、常に神様にお願いしながらの毎日です。

彼女は、名前を覚えた利用者さんに対しては、「誰々さん」と、名前で呼び掛けます。利用者さんの方からも、「小森さん」と、名前で呼ぶ人が大勢います。

若いスタッフは介護の知識は豊富ですが、利用者さんの大半は高齢なので、心のケアまではなかなか行き届かないことも多いのですが、その点、若いころから苦労を重ねてきた小森さんですから、少しは利用者さんの気持ちが理解出来るのです。

時には、気心の知れた利用者さんから、家庭内の相談を受けることもあります。そんな時は、「あなたの奥さんもお年ですから、介護は大変ですよ～。足りないこともあるでしょうけど、

足りないところばかりに目を向けて不足を言っていたら、奥さんが可哀想。してもらってるところに目を向けて、お礼を言ったらどうでしょう？」と優しく答えます。

小森さんは右足が少し不自由なのですが、そんな彼女を気遣って利用者さんの方から逆に、「大丈夫ですか？」と声を掛けてもらうこともあります。そんな時、小森さんは、「ありがとね」と答えます。

彼女の口癖は、「ありがとね」。どんな小さなことでも、「ありがとね」を繰り返す彼女を見て、若いスタッフは不思議がるほどです。仕事上のことでも、何かをしてもらうと、「ありがとね」なのです。「ありがとね」が、彼女の生き方の原点なのですが、その「ありがとね」の心を育てているのが、金光教の教会へのお参りです。

小森さんが初めて教会に参拝したのは、実はその足の痛みがきっかけでした。彼女が十五歳の時、お父さんが病気で亡くなりました。二人の妹がいたこともあって、家計を助けるために彼女は中学を出てすぐに働き始めました。

金属加工会社で総務の仕事をしていた三十二年前、小森さんが三十五歳の時、仕事場の階段を上がり降りすると、それまで何ともなかった両方の股関節に痛みを感じるようになったのです。痛みは日増しにひどくなり、我慢が出来なくなって、町の病院で検査を受けたのですが、結果はなんと、股関節の脱臼。それも先天性だというのです。生まれてからそれまで、何の問

題もなく、元気に運動も出来ていた両足なのですが、生まれつき脱臼していたというのです。

小森さんは、病院で勧められるまま手術を受けることになりました。その入院の準備をしていると、妹のお姑（しゅうとめ）さんから、「そんな大事な手術をするのだったら、一度教会へお参りしたらどうか」と言われ、その時参拝したのが笠松教会でした。お姑さんはこの教会の信者さんだったのです。

教会へお参りすると、先生は、ご神前で神様にお祈りした後、すぐに、「岡山県にある金光教の本部まで参拝しませんか」と言われたのです。小森さんはびっくりしました。初めてお参りしたばかりなのですから。それも、もう痛くて一人では歩けなくなっていた彼女を、八十歳近い高齢の教会長先生が、奥様と一緒になって、夫婦で彼女の両脇を抱えてお参りしようというのですから。何という優しい温かい先生だろうと、感激しました。

本部では、金光教の教主である金光様に病気のことをお話出来ました。そして先生方と一緒にご神前でお祈りし、その後帰り道、岡山の治療院で治療を受けることになり、そこでの治療の後からは一人で歩いて帰れるほど楽になったので、その治療院の先生の言われるまま手術は回避することになったのです。

それ以来ずっと、手術はしないで、岐阜で治療を続け、今では左足は股関節に治まり、右足はまだ半分外れたままなのですが、時折起こっていた痛みも数年前には全くなくなりました。

頑張り屋の小森さんは、六十歳まで勤めていた金属加工会社時代、よく上司とぶつかったと言います。自分の意見を聞いてもらえず、そのために仕事がうまくいかなかった時などは、悔しくて悔しくて泣きながら教会へお参りしたことも数々ありました。教会で先生に何でも聞いて頂き、腹の中を全部吐き出して元気になってまた仕事へ、そんな繰り返しの日々でした。

教会に参り始めのころは、自分の願い事だけがかなえばいいと思っていましたが、教会で先生や信者さんたちと触れ合っているうちに、人々やいろんな物のお世話になっている自分が見えてきました。それに従って、段々感謝の心を大事にした生き方が身に付いていきました。その結果が、今の、「ありがとね」という言葉となって現われて来たのです。

介護は決して楽な仕事ではありません。それどころか、むしろきつい仕事です。それでも、今の小森さんの願いは、いつまでもこの仕事を続けること。彼女の今の一番の楽しみは、利用者さんの笑顔を見ることなのです。いくらきつい介護の仕事でも、利用者さんの喜ぶ顔さえ見れたら、それだけでいいのです。

小森さんは今日も笑顔で、「ありがとね」の言葉と共に、介護の仕事に頑張っています。

《信者さんのおはなし》

「化粧品店を続けて五十年」

市内のあちらこちらに「メガネ」と書かれた看板が多く見られる福井県鯖江市は、地場産業であるメガネの生産量日本一を誇る山に囲まれたのどかな町です。

この鯖江市で化粧品の専門店「コスメティックス美香」を経営して五十年。金光教武生教会に参拝される藤枝和美さんは七十一歳。化粧品販売では、県内でも有数の売り上げを誇るお店を経営しています。今も七十代とは思えない、奇麗な肌、明るい笑顔でお客様と向き合います。

藤枝さんは、小さいころから人の顔や髪を奇麗にすることが大好きで、大きくなったら化粧品屋さんになるのが夢でした。

化粧技術の勉強をしながら働いていた二十歳の時、通勤する電車の中でご主人と出会いました。お付き合いする中、藤枝さんが、「いつか化粧品の店を持ちたい」と話すと、ご主人も賛成してくれ、話はトントン拍子でまとまり、二十一歳で結婚、そして、西鯖江駅前に小さいながらも念願の化粧品店をオープンしました。

当時は、短い時間でどれだけのお客様を奇麗にして、満足頂けるかが勝負で、役所や農協、メガネ屋、会社などに出掛けて販売に回る毎日でした。

藤枝さんは、「一日百回ありがとうございますを言おう」という信念で商売に励みました。

藤枝さんの信心は、幼いころ、お母さんにお

ぶさって教会に参拝した記憶から始まります。夏の夜の参拝の帰り道、お月様が奇麗で、美しい星が光り輝いていました。お母さんは、「金光様は、天地の神様だから、お月さま、まんまんちゃんに手を合わせなさい」とか、帰りにおしっこをしたくなった時には、「地面の神様に申し訳ないから、早く帰りましょう」と藤枝さんの手を引き、急いで家まで帰ったこともありました。「天地を尊び、汚さないように」とお母さんから教えられたことは、今でも心に残っています。

藤枝さんが十九歳の時、お父さんが食道ガンで亡くなりました。その時もお母さんは、「手術は大変だったが、あまり苦しまずにいられたのは、神様のおかげだった」と大きな心で受け止めます。

何かと苦労の多い人生でしたが、お母さんはいつもニコニコと感謝の心を大切にされました。そのお母さんの言葉や行動が、お店の合い言葉「一日百回はありがとうを」につながっています。

藤枝さんは長女、長男、次女と三人の子どもを授かりました。子どもたちが学校から帰って来て、「お母さん今日学校で…」と、いろいろ話そうとしますが、「後で後で」となってしまうほど仕事は忙しく、三人の子どもたちに構う時間がありませんでした。

長男は、小学校一年か二年の作文に、「お母さんはお店にいる時はニコニコとしてるけど、家へ帰ると鬼の顔」と書くほどでした。藤枝さ

んは、「その時は仕事に一生懸命だから子どもの気持ちが分からなかった。もっと子どもの目線で見てやれば良かった」と後悔します。

やがて子どもたちも成人したころ、今度はお姑（しゅうとめ）さんが認知症になりました。ご主人は名古屋へ転勤のため、藤枝さん一人で、仕事、主婦、介護の三役をこなすことになりました。そんな時、あいにく藤枝さんは胆のう炎となり、入院を余儀なくされました。

その時、東京にいた大学四年生の次女が、「お母さん一人では大変だから」と帰郷し、手術する間お店を手伝ってくれることになりました。仕事に明け暮れる毎日で、家庭のことを全く顧みなかった藤枝さんには思いも寄らないことでした。

入院した藤枝さんの所には、お客様などたくさんの人がお見舞いに来られて、お医者様も驚くほど病室がお花で埋まりました。その様子を見た次女は、「お母さんはこんなにお客様から慕われていたんだ」と、お店を継ぐことを決心したのでした。長男、長女もそれぞれ独立し、藤枝さんを陰ながら支えてくれるまでになりました。

藤枝さんは、人とのお付き合いを大切にする中で、お客様からいろんな相談を受けることも次第に多くなりました。中には悩みの相談もあります。そんな時は、お客様の話に耳を傾け、一生懸命心の中で祈りながら話します。

開店五十年を迎える今日では、お客様も三世代に渡るようになりました。「お客様や関わり

ある方々のことを祈らせて頂き、お役に立つことが出来る喜びを感じています」と、藤枝さんは言います。

お客様と長くお付き合いをさせて頂きながらも、今は、大型店が次々とオープンし、インターネットで商売をする業者も多く、決して順風満帆とはいきません。

時には、「せっかくお客様に一生懸命お化粧したのに売れなかった」と娘さんに愚痴ると、最近では、「お母さん、お客さんに話を聞いてもらっただけでいいじゃない」と言ってくれます。その時、ハッとさせられ、娘さんから気付かせてもらうこともあります。

藤枝さんは言います。「振り返るといろんなことがありましたが、私は本当にいっぱい、いっぱいおかげを頂いています。これも小さいころ、母の信心と、教会の先生の祈りが、私の心に信心の基礎とでもいうべきものを植え付けてくれたからだと思います。それは、何があっても笑顔で、そして感謝の気持ちを忘れなければ必ず神様が守って下さる、何とかして下さるというものです」。

「一日百回ありがとう」をモットーに、藤枝さんは今日も笑顔で娘さんと一緒にお客様に向き合います。

《信者さんのおはなし》

「わがいのち」

和歌山県の金光教熊野教会に参拝する、濱邊誠治さん。近くには、落差百三十三メートルの高さから落ちる那智の滝があります。それは力強く、気高い雰囲気を漂わせています。熊野の地で育った濱邊さんは、今七十歳ですが、これまで何度も命を助けられてきました。

小学校三年生の夏、重い病気にかかって、学校を二カ月くらい休むことになりました。高い熱が何日も続いて、鼻血が止まらず、洗面器一杯くらい出ました。お医者さんから、「この子は治っても障害が残るかもしれません」と言われ、お父さんは必死の思いで、自宅から二十キロの道のりを、自転車で教会にお参りしました。わが子の病気を助けて頂きたい一心でした。お父さんの熱い思いが通じたのか、濱邊さんは、次第に元気になっていきました。その時のことは、幼い濱邊さんの心の中に、印象深く残りました。

お父さんからは、「教会にお参りすることが大切なんだよ」とよく聞かされました。お父さんが教会へ参り始めたころは、自転車で長い道のりを通っていました。その後に、自動車免許を取り、近所の信者さんを五人ほど乗せてあげて、お参りしていました。朝のまだ暗い三時五十分頃、子どもだった濱邊さんも、「お参りに行くぞ」と勢いよく起こされ、付いて行きました。濱邊さんは当時のことを振り返って、「今

から思うと、私は素直だったのかなあ」と、照れながら言います。

雨の日も風の日も休むことなく、お父さんは、お参りを三十年以上続けていたそうです。そんなお父さんの影響を受けて、濱邊さんも、十九歳くらいから五十年近く、朝のお参りを続けています。

若いころの濱邊さんは、教会の青年会活動をしていましたが、そこで奥さんと出会い結婚し、四人の子どもを授かりました。奥さんが四人目を妊娠した時、命の尊さを強く感じさせられる出来事が起こりました。

妊娠六カ月の時、突然出血し、診察を受けると、胎盤が普通の位置にない状態でした。当時は医療技術が進んでおらず、命を亡くした人もあったようです。お医者さんから、「この場合、子どもをおろす人もありますが、どうされますか。でも、赤ちゃんはもう、七カ月目近くになってますしね～」と言われました。身内や周りの人たちは、とても心配し、三人も子どもがいるんだから、無理して産まなくてもいいんじゃないかと言う人もいました。奥さんは、産めるものなら産みたいという気持ちでした。

どうすべきか迷った濱邊さんは、教会にお参りし、先生に相談しました。先生は、「せっかく神さまから授かった命。大切にしましょう」とおっしゃいました。その一言で、濱邊さんの決心がつきました。「産ませてもらおう」と。

お医者さんから言われたことは、少しでも、おなかの中で赤ちゃんが成長するように、安静

を心掛けることでした。そして、妊娠九カ月になった時、大出血を起こして、帝王切開で赤ちゃんを取り出してもらうことになりました。

仮死状態で産まれ、酸素濃度の高い保育器に、一週間くらい入っていました。赤ちゃんの目が駄目になるかもしれないと言われ、また奥さんの方も、三十九度の高熱が五日間続きました。濱邊さんは看護をしながら、「助けて頂きたい」とすがる思いで朝のお参りを続けていました。教会の先生からは、「心配な気持ちにばかり目を向けず、一心にお願いして看護をしてあげて下さい。幼い命も、奥さんも、精いっぱい頑張っておられます」と言われ、

勇気付けられました。すると次第に、奥さんの熱も下がり、赤ちゃんも段々と元気になりました。

あれから三十年くらい経ちますが、現在はその息子さんの世話になり、一緒に暮らしておられます。

濱邊さん自身も、十五年前、心臓弁膜症で十二時間に及ぶ手術を受け、無い命を助けて頂いたと言います。脳梗塞も三回起こしましたが、いずれも大事に至らずに済みました。お医者さんからは、「不思議やなあ、あんた、どうして生きてるんか、不思議や」と言われるほどです。

濱邊さんは、どんな苦難の中にも、迷うことなく、くじけることなく、「いつも神様に守って頂いているんだ」という信念を持っています。

濱邊さんの毎日の心掛けとして、目が覚めたらまず、いのちを頂いたことに感謝します。そして、金光教の四代目の教主である、金光鑑太郎先生のお歌を唱えるそうです。

ちちははの　いのちにつづく　わがいのち
わがものにして　わがものならず

子どものころ、朝早くから親に手を引かれ、眠い目をこすりながらも、教会にお参りしていた濱邊さん。今では、自分のことだけではなく、家族のみんなも尊いいのちを頂いていることに、お礼を申し上げずにはいられません。

濱邊さんは振り返ってこう言います。「信仰の有り難さを、身に染みて感じております。もし信心していなかったら私はどうなっていただろう…。苦しいことにばかりとらわれて、暗い人生になっていたと思います…」。そう語る濱邊さんの目は、少し潤んでいました。

何度も命を助けて頂いた神様への揺るぎない確信を胸に、そして、そんな信心を身を持って伝え、残してくれた親の思いに包まれて、濱邊さんは今日も教会にお参りします。

《信者さんのおはなし》

「二つの大震災に遭いました」

おはようございます。今回は福島県の郡山市にあります金光教岩代郡山教会をお訪ねしています。こちらの教会の玄関には、東日本大震災の時に出来たひび割れが生々しく残っていて、当時の激しかった揺れを物語っています。また、教会には放射線量測定器が置かれてあり、現在も原発の問題が残されていて、大震災からの復興が大きな問題として横たわっていることを感じさせられました。

しかし、教会の中に入りますと、ありがたい雰囲気と共に明るく家庭的な雰囲気が漂ってきます。それは神様をお祭りしてあるお広前の隣に、参拝者たちがくつろげるスペースが用意されていて、お茶を飲みながら、先生と信心の話が出来るようになっているからでしょうか。そんな岩代郡山教会に参拝している西田さんに、話を聞いてみました。

西田幸重さんは大阪生まれの四十三歳です。西田さんは仕事で神戸、広島、高松、そして郡山へ転勤してきて、こちらの教会にご縁を頂いたそうです。西田さんの家は、ひいおじいさん、ひいおばあさんの時代から既に金光教のご信心をされていました。ひいおじいさん、ひいおばあさんの代からといえば、ざっと計算しても百年以上も前からの信心が、ずっと続いているということになります。

ですから西田幸重さんは信心の四代目。小さ

い時から、「悪いことをしたらあかんよ。神さんが見てはるからね」。そんなふうに生活の中に自然と神様という言葉が使われる家庭で育ち、神様も教会も小さい頃からとても身近な存在だったそうです。

そのように小さい頃から、自然と教会にお参りしていた西田さんですが、中学生になってからは、金光教のフォーゲル隊というものに参加するようになりました。フォーゲルというのは、金光教の教えに基づいて、少年少女を育てようという活動で、リーダーと共にゲームやキャンプをする中で大切なことを学んでいくのです。

フォーゲルでは、「実意に生きる」「全ての人を愛する」「笑って困難に当たる」「たゆまず進歩する」という四つの目的を掲げて活動しています。西田さんは、このフォーゲルに参加しながら成長し、小さい頃には、「親が信心しているから」「家の宗教だから」という感じでしたが、次第に金光教こそが自分の求める信心であるということに目覚めていきました。

さて、この西田さんが高校を卒業し、神戸で就職をしていた時、阪神淡路大震災が起こりました。その時、西田さん二十四歳。若かった西田さんは、「出来るだけ体を動かしての救助活動をしたい」と、被災した教会やフォーゲルの仲間を訪ねて、懸命にボランティア活動に励みました。フォーゲルでの経験を生かし、小学校に子どもたちを集めて一緒に遊んだり、お菓子を配ったりしました。ストレスに侵され、暗い顔だった子どもたちが笑顔を見せてくれたの

は、この上ない喜びでした。

一方、会社は被災したため、親会社に吸収され、そこから西田さんの転勤生活が始まったのでした。でも、転勤先にはいつも金光教の教会が近くにあり、フォーゲルの仲間がいました。郡山に来た時も、会社のすぐ裏に教会があり、びっくりしたほどでした。

そして、西田さんが郡山に来た翌年、なんと東日本大震災が起こりました。阪神淡路大震災、東日本大震災、この日本で起きた大きな震災の両方を身近に体験した人は珍しいのではないでしょうか。

当時、西田さんは教会の近くの九階建てのマンションに住んでいましたが、家の中がぐちゃぐちゃになり、奥様と子どもさん二人を連れて、教会に避難したそうです。

その後、奥様と子どもさん二人は、奥様の実家に預けました。初めは春休み中だけ、という思いでしたが、しばらくして原発の問題が起こり、別居生活は今も続いています。

一方、阪神淡路大震災の時には若かった西田さんも、今度は責任ある立場になっていました。会社は震災の影響をもろに受け、仕事に追われ、真夜中まで働き、朝も早くから出勤する生活となりました。

阪神淡路の時には、無我夢中でボランティア活動に明け暮れた西田さんでしたが、今回は、また違った体験をしました。

大震災の翌朝、近所のコンビニで若い女の子がいつもの通りに働いているのを目にしまし

た。まるで何もなかったかのように、あまりにも自然に働いている姿に西田さんは胸を打たれました。自分の家がどれほどの被害に遭っていたかは分かりませんが、自分を見失わず、自分のやるべきことをやろうとする、その女の子の姿に感動を覚えたのです。

「そうだ、この震災からの復興は日常生活を取り戻すことなんだ」と西田さんは心に決めました。阪神の時の自分のように、フォーゲルの若い子たちが、ボランティア活動を申し出てくれた時にも、その気持ちはありがたく受けながら、西田さんは彼らに、「今こそ自分の日常を大事にしてくれればいいんだよ。その日常はとてもありがたいものなのだから」と、言葉を掛けました。

西田さんは、「今、ここには苦しんでいる人がたくさんいます。何としてもお役に立つ働きをさせて頂きたいんです」と語ります。二つの大震災を経験した自分だからこそ出来る何かがあるはず、神様はきっと無駄事はなさらないからと、西田さんは心からそう思って、復興に取り組んでいます。

《信者さんのおはなし》

「いいこと、いっぱいあるから」

磐梯山を仰ぎながら、猪苗代湖沿いに車を走らせていくと、今も美しい鶴ヶ城のある会津若松市に到着しました。ここの伝統工芸、会津漆器職人の花泉（はないずみ）仁（ひとし）さんは、五十八歳。包容力のある、優しい笑顔のお父さんです。その笑顔を見ると、これまで波乱の人生を歩んでこられたとは、とても思えません。

仁さんは、四十一歳の時、離婚しました。長女を妻が引き取り、当時小学三年生の長男と幼稚園の年長だった次男を仁さんが引き取りました。

親子三人の暮らしも落ち着いてきた、仁さんが四十七歳の時でした。いつものように子どもたちを学校に送り出し、慌ただしく片付けをしていたその時、心臓にグッと痛みを感じました。でも、痛みはすぐに治まり、職場へ出掛けました。その話を聞いた社長は、とにかく病院に行くよう促しました。すると、心臓の血管が一本でも詰まっていたら一大事なのに、それが、三本も詰まっていたことが分かったのです。その後、より医療技術の高い病院を紹介され、トントン拍子に、三十日間の入院予定で、手術を受けることに決まりました。

仁さんは、仕事を三十日も休むとなると、お金のこと、子どもの世話のことが不安で、お先真っ暗な気持ちになり、社長に相談しました。すると、社長が、「考えてもみろ。人生のうち

三十日くらい休んだからって、大したことないって。体を元気にして、戻ってこ！」と後押ししてくれました。この言葉が、仁さんの転機になりました。

花泉家は、祖父母の代から熱心に金光教の信心をしていましたが、仁さんはこれまで自分は不運なことばかり、と思うと素直になれず、信心していませんでした。それでも両親は、一度も信心を強要したりしなかったそうです。

でも、今回ばかりは、社長の思い掛けない言葉やトントン拍子に入院や手術が決まったことに、仁さんは、両親の祈りと神様の大きな働きを感じました。難しい手術も経過は順調で、退院したその足で、仁さんは、教会に参拝し、神様に素直にお礼が言えました。その後も、教会に参拝するようになり、先生からお話を聞くうちに、「あの時、自分を救ってくれた社長の言葉は、神様からの言葉だったのかもしれない」と思うようになりました。

そして、二〇一一年三月十一日、あの大震災があったのです。仁さんの一家は幸い何の被害もなく、無事でした。しかし、長女が、宮城県の南三陸町に嫁いだことを聞いていましたので、安否が気掛かりでした。毎日報道される震災のニュースを聞いては、娘のことを考えると居ても立ってもいられず、ひたすら無事を祈っていました。

震災から三日後、「お父さん」と電話の向こうから懐かしい声が聞こえてきました。それは、離婚後初めて聞く、紛れもない長女の声でした。

家は津波で流されたけれど、夫も娘も皆無事で、近くの体育館に避難していることを聞きました。

すぐにでも行きたい気持ちでしたが、あらゆる道が寸断され、それは不可能なことでした。やっと娘と再会出来たのは、四カ月後、娘家族の仮設住宅入居が決まったころでした。離婚後一度も会うことのなかった長女に、そして、三歳の可愛い孫のひなたちゃんに会うことが出来ました。皮肉なことに震災が再び親子の縁を結び付けたのです。それから、娘家族との交流が再開しました。

そして、震災から、一年目の冬。朝早く電話が鳴りました。

「ひなたが死にました…」

あまりの衝撃に何のことか理解するのに時間が掛かりました。ひなたちゃんが肺炎を起こし、救急車を呼びましたが、仮設住宅は皆同じで目印がなく、到着するのに時間が掛かりました。さらに医療体制が整っておらず、小児科が無いという理由でどこの病院に行っても断られ、最終的には仙台の病院に搬送されましたが、時すでに遅し、ひなたちゃんは息絶えたということです。

仁さんは、持って行き場のない怒りと悲しみが込み上げ、娘のことを思うとたまらず、教会に参拝し、思いのありったけを神様にぶつけました。その時、仁さんは、ハッとしました。

「おやじと同じになったな」

実は、仁さんの父親も、娘の子を病気で亡く

しているのです。当時、仁さんは、父親がそれでも何にも言わずに、ひたすら教会に参拝して、淡々といつもの生活を送っている姿に、「神様に祈ってたって死んだら何にもならない」と冷ややかに見ていました。でも、今、自分が父親と同じ立場になって、初めて父親のつらさ、悲しさ、そしてその中でも神様にすがっていくしかないという思いを実感しました。そして、「その親の祈りの中に、自分もいたんだ。こんなにも祈られていたんだ」ということが分かり、泣けて泣けて仕方がなかったそうです。

仁さんは娘に言いました。「金光教の神様はな、神様の方から、『氏子あっての神』と言って下さってる。試練はあるけど、乗り越えるだけの力は下さるから」。

これからいいことといっぱいあるからという、お父さんから娘への精いっぱいの言葉でした。

ずっと苦楽を共にしてきた息子たちも成長し、長男は、地元で就職して父親と一緒に暮らす道を選び、次男は、遠く離れながらも父や兄を気遣っています。

子どものことを思う親、親のことを思う子どもたち。目に見えぬ深い親子の情でつながった花泉さん親子。会津若松で、何もかも包み込む豊かな大地と、仁さんの笑顔が印象的でした。

《信者さんのおはなし》

「失敗もＯＫ、何でもＯＫ」

山口和代（やまぐちかずよ）さんは、福岡市にある金光教の教会で、六人兄妹の次女として生まれました。大学を卒業後、航空会社に勤め、結婚を機に、岡山にある夫の実家で専業主婦になりました。

しかし、思い掛けなくも、夫の父親が経営する保育園を任され、二十八歳という若さで園長になったのです。その後、地元の強い要望もあって、夫は社会福祉法人を立ち上げ、保育園を次々と開設。今では、首都圏でも保育園を運営しています。

今年四十七歳の和代さんは、数カ所の保育園の園長として、岡山と東京を月に何度も行き来し、多忙な毎日を送っています。家では毎日、預かっている園児たちに事故、過ちのないように、神様への祈りを欠かしません。また、岡山と東京にある金光教の教会に参拝し、無事安全をお願いします。

先生からは、「何事も自分の力でしようと思わず、神様が園長と思い、お願いしながら務めさせて頂きましょう」という教えを頂き、これまで大きな事故無くこられたことを、心から感謝しています。

和代さんにとって一番大きな転機は、待機児童が最も多い東京都世田谷区で保育園を開設してもらえないか、という話が持ち込まれた時でした。四人の子どもを抱え、岡山の保育園の運営に手いっぱいでしたが、家族の後押しを受け、

単身赴任を決断しました。和代さんの兄妹も全面的に協力してくれ、平成二十三年、無事開設することが出来たのです。

和代さんは、「自分の力で進んでいないし、色々な出会いにしても、勉強にしても、何か導かれているなということを強く感じます。だから、頑張らなくちゃ、という気持ちが湧いてくるんです」と言います。

思い返せば、小さな頃から参加してきた教会での少年少女の育成活動や、大学で児童教育を専攻したこと、さらには客室乗務員として、世界各地の様々な人たちの考え方や生き方に触れ、経験してきたこと全てが、色々な場面で和代さんの支えになってきました。嫌なことでも、つらくても、一生懸命に取り組んだこと、失敗したこと、その時は意味のないように思えたこと、どれもこれもが無駄事ではなかった。すべては神様のお導きを頂いてのことなんだ、と思えるのです。

今日、保育園では、保護者を始め、地元の人たちとの関係、不足がちな保育士の確保など、対応しなくてはならない事柄をたくさん抱えています。東京で開園した当初は、園の窓を開けると、「うるさい」と電話が掛かってきたり、「散歩の時、うちの前を通らないで下さい」と言われることもあったと言います。

保護者からは頻繁に色々な要望が持ち込まれ、中には子どもに虐待をする親もいます。問題を抱えた時には、教会に参拝して神様にお願いし、相手の立場に立って、時間をかけ保育へ

の理解と協力を得られるように務めています。

子どもは小さな頃、よく手でご飯をくちゃくちゃするものです。中には、「汚いからやめなさい」と叱る親がいますが、そんな方に和代さんは、「子どもが触って、確かめて、食べようとする意欲を大事にしてあげて下さいね。根気がいりますが、必ず上手に食べられるようになるし、遊びたいとか、勉強したいという意欲も持てるようになりますよ」とアドバイスします。人を優しく包み込むような笑顔からは、日頃色々な対応に追われている園長としての大変さはみじんも感じられません。

金光教祖は、子どもを叱り叱り育てるな。恐れさせ恐れさせ育てるな、と教えておられます。和代さんは、叱って子どもを育てるのではなく、目の前のありのままの子どもを受け入れ、子どもの歩調に合わせて、その子の成長を楽しめるような子育てを願っているのです。保護者にも保育士にも完璧を求めず、「失敗もＯＫ、何でもＯＫ」という心構えを共有してもらえるように務めています。だからこそ、どんなに多忙でも、柔らかな心で子どもや保護者、保育士に接し、子育てを楽しめるのでしょう。

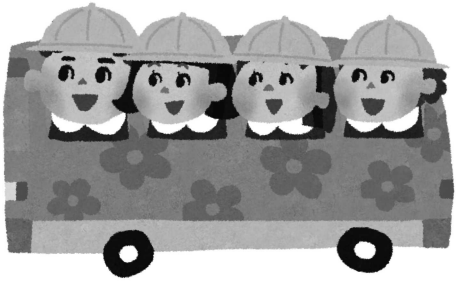
親は、子どもの幸せを願うあまり、ややもすると先回りして、子どもが失敗しないように、親の言うことを聞く子を育てようとすることがあります。

和代さんは、「そんな親の思いを中心にした子育てでは、子どもの中に、自分で考える力、自らを律していく心が育ちにくいんです。子ど

もは、頭の構造が大人と違っていて、言葉で聞かされただけでは分からないんですよ。自分でやってみて、失敗して、考え、そこから知恵を獲得するんです。このような子ども特有の発達を理解して、『失敗もＯＫ、何でもＯＫ』というような、おおらかな心で子育てが出来るといいですね」と言います。

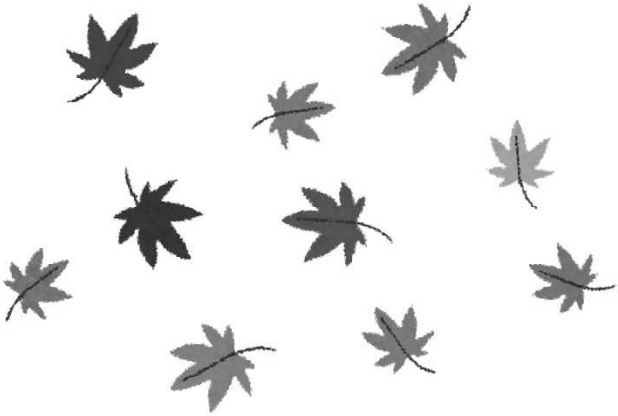
　実際に保育園では、子どもたちで考え、話し合って物事を決めたり、問題解決に取り組むこともしています。「子どもたちは真剣に話し合うんですよ。時間はかかりますが、ほかの子との関わりを通して、仲良くしていく知恵も身に付き、年々変わっていくんです。そんな子どもの成長を見られるのが一番うれしいし、子どもの変化を通して、保護者や保育士が変わっていけるのもありがたいです」と話す和代さん。

　今日も、神様のお導きを頂き、子どもの歩調に合わせ、大人も共に成長していく保育が少しでも広まっていくことを願いながら、楽しく仕事を進めています。



そつえんアルバム

入園式



金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　0865-42-6453

FAX　0865-42-2114

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

北海道放送	土曜日 あさ5時10分
東北放送	日曜日 あさ5時00分
ニッポン放送	日曜日 あさ4時30分
東海ラジオ放送	金曜日 あさ5時25分
和歌山放送	日曜日 あさ6時50分
朝日放送	水曜日 あさ4時50分
山陽放送	日曜日 あさ6時35分
中国放送	土曜日 あさ5時50分
南海放送	日曜日 あさ6時00分
RKB毎日放送	日曜日 あさ6時50分
宮崎放送	日曜日 あさ7時10分

こころで聴くおはなし 検索